The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヘーゲルにおける絶対的否定と限定的否定 ： 『精神現象学』における主と奴の弁証法についての一考察
Author(s)	石崎, 嘉彦
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1980, 14, p. 53-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4290
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヘーゲルにおける絶対的否定と限定的否定

―『精神現象学』における主と奴の弁証法についての一考察―

石崎嘉彦

はじめに

「否定性(die Negativität)」がヘーゲル哲学の中心的概念であることは、今更改めて言うまでもない事である。それは、言うなれば、ヘーゲル弁証法の「魂」とも言うべきものである。ヘーゲルが、彼に先行するフィヒテ、シェリングの立場を起えて独自の立場を築き得たのも、この「否定性」概念の新たな把握に基づいてのことである。ヘーゲルが独自の立場を確立し、新たな哲学の成立を宣言した『精神現象学』の「序論」(Vorrede)が、頻繁に「否定性」、「否定的なるもの(das Negative)」、「否定(die Negation)」について語っているもの、まさにこの故である。この『現象学』の「序論」は、慥かにヘーゲルの思想を、極めて凝縮した形で述べたものではあるが、しかしそれが『現象学』の全叙述を完了した後に著わされたものであることから、この論述の根拠となっているものを、「現象学」の本論の中に見出しうるはずである。そこで我々には『現象学』の本論に立ち入って、ヘーゲルに

おける「否定」の意味を考察することが課題となってくる。しかし、その際、「自己意識」の章に含まれている、主人と奴隷の関係についての論述が、この考察に最も多くの示唆を与えてくれるように思われる。それというのも、この関係の成立とこの関係の和解の運動において、それ自身「否定的なもの」である自己意識の「否定」の働きが、それをつき動かす当のものだからである。そして、この運動において「主」の意識と「奴」の意識が、それぞれ異った意義をもった「否定」の運動を繰り広げることに注目されねばならないであろう。

一

しかし、我々は先ずさしあたって、「序論」の論述にしたがって、ヘーゲルの「否定性」、及び「否定」についての一般的観念を得ることから始めなければならない。

ヘーゲルは「序論」の論述を開始してしばらく進んだところで、「実体」(Substanz) が「主体(Subjekt)」であるという周知の命題にふれながら、次のように述べている。即ち、「実体は主体としては純枠にして単純なる否定性である。そしてまさにこのことによって単純なものを分裂させる、いい換えれば、対立するものへと二重化するのである。そしてこの二重化したものが、この没交渉なる差異と、それによって生じる対立とを再び否定するのである」(S. 20)[1] と。おそらく、この言葉はヘーゲル弁証法の核心を言い尽くしているといっても過言ではないだろう。そしてヘーゲルはこの言葉に続けて「根源的な、或は無媒介的な統一そのものではなく、このような己れを回復する同一性、或は他在のうちにおける自己自身への還帰のみが真なるものである」(ebd.) と述べ、それ故に「真なるものは自己自身となる生成であり、円環である」(ebd.) ことを述べている。

このように実体を主体とするヘーゲルの立場は、実体を否定性と把えることに他ならない。ヘーゲルは、このことによって、実体を静止的で固定的なものとしてではなく、それ自身運動する動的なものとして把えようとするのである。それ故、ヘーゲルにとっては、「真なるもの」は「運動」として、またこの運動の結果として把えられることになる。ヘーゲルが「真なるものは全体である」(S. 24) とか、「真理とはそれ自身における自己運動である」(S. 40) と述べるのも、まさにこの故である。そうしてここから「真なるものは体系としてのみ現実的である」(S. 24) という周知の言葉が述べられているのである。したがって、無媒介的なる同一性をもって真理とする立場は、ヘーゲルの採るところではない。ヘーゲルにとっては、真理が直接的で無媒介的なるものであるにしても、それは、運動の結果としての媒介された直接性であり、運動の中で安らっている同一性、或は、流動的でありながら全体としては「単純なる静止」(S. 39) であるところのものに他ならないのである。ヘーゲルは、これを「バッカスの陶酔」(S. 39) に譬えているのであるが、それが意味するものは「真理が現実に存在するエレメント」(S. 12) としての「概念」(der Begriff) に他ならない。

ところで、この運動の「魂」(die Seele) は「否定性」であったが、この「否定性」の故に、実体には「自分自身を定立する運動」(S. 20) が生じるのである。この「自分自身を定立すること」(Sichselbstsetzen) は「自ら他となること」(Sichanderswerden) であり、実体が自己を「疎外」(Entfremdung) することに他ならず、それはまた「分裂」(Entzweiung)、「二重化」(Verdopplung)、「区別」(Unterschied) とも表現されている。そして実体は、この疎外によって「自ら他となることの自分自身との媒介」(S. 20) という関係に入るのである。ヘーゲルにおいては、「否定性」とはこの「媒介」(Vermittlung) に他ならない。或は、「否定」はこの「媒介」への移行なのである。我

々はここに一つの「否定」(Negation) の働きを認めなければならないであろう。

しかし、ヘーゲルは同時に、「媒介とは自己運動する自己同一性に他ならない」(S. 21) とも述べている。即ち、「媒介」とは「対自的に存在する自我という契機」、「純粋なる否定性」(ebd.) でありながら、同時に「自己自身への還帰」であり、「単純なる生成」(ebd.) なのである。この「還帰」(Reflexion) とか「生成」(Werden) にもう一つの「否定」があることを我々は認めなければならない。それは「疎外」の克服である。実体は己れの他であることを「否定」して自己自身へと「還帰」するのであり、この「生成」によって「結果」(Resultat) としての「単純な(einfach)もの」が生じてくるのである。「生成とはむしろこの単純性へと還帰していることに他ならない」(S. 22) のであって、この還帰によって実体は己れの他在と再び和らぎを得る(versöhnen) のである。そしてこの再興された「単純性」或は「無媒介性」は、むしろ「媒介」された「単純性」(Einfachheit)、「無媒介性」というべきであろう。

したがって、ヘーゲルの弁証法には二つの否定の運動があることになる。第一の否定は、無媒介的な自己同一性が分裂して己れの他在を定立する運動である。第二の否定は、この分裂の否定性を否定してより高次の統一へと生成する運動である。しかしこの「最初の否定」(S. 28) と「否定の否定」としての第二の否定も、ヘーゲルにとっては単なる言葉の遊戯などではない。

実体を主体と把えるヘーゲルの立場は、同時に、「絶対者を精神として語る」(S. 24) ことでもあるが、こうして「絶対者も本質的に結果として把握される」(S. 21) ことになる。しかし、精神が結果として、絶対者としての己れの実を示すのも、かの「否定」の運動、即ち「媒介」によってのことである。それ故に、精神は「否定的なも

のの真剣さと苦痛と忍耐と労働」(S.20) なくしては「絶対者」(das Absolute) たり得ないのである。絶対者が「生成」であるということは、「精神が絶対的な分裂(Zerrissenheit) の中に自分自身を見出すことによって己れの真理を獲得する」(S.30) ことに他ならない。そのためには、精神はこの「否定的なるものから目をそむける」(ebd.) のではなく、まさにこの否定的なるものを「直視して、そのもとに身をおく」(ebd.) のでなければならないのである。この「否定的なるもの」の最たるものは「死」(Tod) に他ならぬが、「死に耐え、死の中で己れを維持する」(S.29) ことこそまさに「精神の生」なのである。

「否定の否定」とは、精神のこの「労苦」(Anstrengung) と「労働」(Arbeit) の思想に他ならず、「死」に耐え、「死」を「超えて生きる」(überleben) 精神の生を表明したものに他ならないのである。この「死」を「超えて生きる」思想こそヘーゲルの哲学及び弁証法の核心であろう。そこで我々は、「死」という「絶対的否定」を超えて「生」という「肯定的なるもの」をもたらす「否定」の意味をなお立ち入って考察しなければならない。

二

『現象学』における主―奴関係の論述は、無媒介的な承認の関係から、承認をめぐる生死を賭した戦いの結果としての「一面的で不同なる承認」(S.147)を経て、奴の自立的自己意識への生成による「相互承認」の回復の運動として示されているように、ヘーゲルの弁証法の基本的構造をそのまま示している。それ故、この関係の考察を通じて、ヘーゲル弁証法における「否定」の意味を猶一層明確になしうるはずである。我々は、先ず、承認の即自的な段階から、対自的な段階への移行の運動を見ていかねばならない。

ヘーゲルの「自己意識」の運動の出発点は、フィヒテの「自我は自我である」(S. 134) という「同語反復」(Tautologie) の命題である。しかし、自己意識がこの命題に終止するなら、「自己意識」というエレメントにおける内容豊かな経験をなすことはできないであろう。それ故に、ヘーゲルにとっては、自己意識も「区別」(Unterschied)を有していることになる。この自己意識の区別とは、自己意識にも「他的存在」(Anderssein) があるということである。ヘーゲルは「自己意識」の章の序論的部分において、この自己意識に対する「他的存在」が「他の自己意識」(ein anderes Selbstbewußtsein) であることを示しているのである。ヘーゲルによれば、「自己意識が実際に存在する」(S. 140) のは、「一つの自己意識が一つの自己意識に対して存在する」(ebd.) という関係においてのことなのである。そうして、この関係において、両自己意識が相互に「対自的に存在する自己意識」(ebd.) であり、「完全に自由で自立的でありながら」(ebd.) 統一を得ているというのが「精神の概念」(ebd.) に他ならない。この「精神的統一の概念」(S. 141) は「承認の運動」として現われてくる。しかし、ヘーゲルはこれらの「精神の概念」や「承認の運動」を「我々にとって」(für uns) の立場から述べているにすぎないのである。

したがって、「自己意識」の章で述べられる「承認の概念」も「精神の概念」も、さしあたっては、即自的なるものでしかない。それ故、この即自的な承認の関係は対自の段階へと移行しなければならないのである。対自の段階へと移行した承認の関係は、「一面的で不同なる承認」としての「主人」(Herr) と「奴隷」(Knecht) の関係であり、それは「否定的なるもの」に他ならない。かくして、主—奴関係は、相互承認が完全には実現されない段階における自己意識と自己意識の関係であると言えよう。或は、むしろこの関係は両自己意識の対立的な関係と言えよう。

ところで、両自己意識を分裂させ、かかる対立的関係へと向かわしめるものは、承認をめぐって繰り広げられる両自己意識の「生死を賭した戦い」(S. 144) である。そして「戦い」(Kampf) とはまさに「否定」(Negation) の行為に他ならない。ヘーゲルは、フランクフルト期の草稿の中で「自然状態の喪失の後に続く野蛮状態」[2] (W. I. S. 274) という言葉を使っている。両自己意識の「生死を賭した戦い」は、まさにこの「野蛮状態」(Rohheit) に他ならないであろうし、また即自的な承認の関係も、この「自然状態」(Naturzustand) と解することができよう。しかしいずれにせよ、自己意識が自己意識でありうるためには、この「戦い」と「分裂」の状態を経なければならないのである。

ところで、かの即自的な承認が分裂して戦いへと向かうためには、この関係自身が「否定的なるもの」でなければならない。そこで我々は、この承認の関係を今しばらくみてみなければならない。その際、ヘーゲルが「自己意識」の出発点に据えた「自我は自我である」という命題が想起されるべきである。

この命題は、判断の形式からすれば、「同一判断」(identisches Urteil) である。それは主語と述語が同一である判断であり、それ故に無媒介的な「自己同一性」(Sichselbstgliechheit) を表わすものである。ところで自己意識と自己意識の同一判断的関係は、対象である自己意識が「対象であると全く同様に自我でもある」(S. 140) ことによって、次の二つのことを意味している。即ち、一つには自己意識が自分自身との統一を得て、己れの「自分だけでの存在」(Fürsichsein) に達しているということ、もう一つには、自己意識が己れの対象である「他の自己意識」と統一の関係にあるということを意味しているのである。自己意識が「欲望」(Begierde) としてあり、己れの対象が「生命」であるなら、自己意識は対象を撤廃することによって自己自身との統一、即ち「自分だけでの存在」

であることに達したが、対象が自己意識となると、自己意識は対象としての自己意識を媒介として「自分だけでの存在」を得る。したがって前者の関係は、媒介的な関係となっている。しかし承認の関係において、後者の自己意識の他の自己意識に対する関係は無媒介的である。それ故に後者の関係からすれば、「この同一判断は同時に無限判断である。」(S. 370) ヘーゲルが承認の関係を「両力の遊戯」(S. 142) という表現で示したのはこのためである。なぜなら「両力の遊戯」は「推論」(Schluß) と「無限判断」(unendliches Urteil) の両方の性格を合せ持つものだからである。(3)

ところで、「無限判断」は、「否定的無限判断」としては、「主語と述語の完全なる不一致」(W. 8. S. 324) ということをその特徴としている。したがって、もし「対象」である自己意識が単なる「対象」としての意義しか持たないならば、自己意識と自己意識の関係も、自己意識と物とが無媒介に結合している「無限判断」の関係である他はないだろう。ところが両自己意識が相互に自己意識であることを呈示していないとすれば、自己意識も他者にとっては単なる「生命の存在」に「沈潜させられた意識」(S. 143) でしかない。したがって、自己意識は相互に自分が自己意識であることを呈示しなければならない。こうして両自己意識は必然的に戦いに向わねばならなくなるのである。

ヘーゲルは、自己意識が自己意識であるということ、或は、「自分だけでの存在」であるということは、「あらゆる直接的存在を滅却し、自己同一的意識であるという純粋な否定的存在」(S. 143) であるということとしている。自己意識はこの「確信」(Gewißheit) を「真理」(Wahrheit) となすために「自己の生命を賭ける」(S. 145) ということを実際に「行為」(Tun) として行わなければならないのである。というのも「純粋な否定的存在」であるとは

「生命に縛られていない」(S. 144) ということだからである。しかもこのことが相互行為として行われるのであるから、「他者の死を目指す」(ebd.) 行為となるのである。ヘーゲルは、この関係においては、「各人は自己の他在を純粋なる自分だけでの存在、或は絶対的否定として直観せざるを得ない」(S. 144) と述べている。それ故、「他者の死を目指す」行為は、他者が己れにとって「絶対的否定性」(die absolute Negativität) であり、かかる否定性に対する行為も「絶対的否定」の行為とならざるを得ないということに基づいている。そして、この戦いの結果は「死」であるが、この「死」はまさに「絶対的否定」(die absolute Negation) の行為の結果に他ならない。(4)

我々は、この戦いが両自己意識の「無限判断」的な関係から生じることを見てきた。『現象学』においては、精神と物、或は自己と存在といった相互に対立の関係にあるものがその立場を一挙に転換する場合に、しばしばこの判断が考えられているように、ここでも「結果」としての「死」によって「自己意識」が「物」或は、「物性の形態にある意識」(S. 145) へと一挙に転落するのである。そうして、この判断は、否定的なるものとしては、述語の特殊的領域だけではなく、普遍的領域をも否定するのであり、この判断の否定は、「全称的否定」(W. 5. S. 49) である。(5) それ故、この否定は、まさに「絶対的否定」であると言よう。

更に、ヘーゲルが「観察する理性」(Beobachtende Vernunft) の最後の部分で述べているように、「無限判断という契機は、無媒介性から媒介性、或は否定性への移行態である」(S. 253) から、ここでは「死」によって象徴される自己意識の物化したものを「媒語」(die Mitte) とする媒介的関係が成立することになるのである。したがって、主—奴関係は媒介的関係である。勿論、この関係においても、主の契機だけを取り出してみれば、「主は己れを無媒介に両者（物と奴）に関係させる」(S. 146) のであるから、主の否定は「絶対的否定」であることに

なろう。しかし、ヘーゲルは、以後の媒介的関係の中では、主の「絶対的否定」の契機には多くの意義を認めてはいない。ヘーゲルが意義を見出すのは、むしろ奴の「労働」(Arbeit) の契機である。「否定的なるもの」としての主と奴の一面的な承認の関係が「相互承認」の関係を回復する運動は、それ自身媒介的なものとしての奴の労働によらねばならないのである。

三

ヘーゲルは、主—奴関係を次の二つの「推論」(Schluß) によって示している。第一の推論は、「主が自立的存在を介して奴に媒介的に関係する」(S. 146) というものであり、第二の推論は、「主が奴を介して物に媒介的に関係する」(ebd.) というものである。前者、即ち、主—物—奴の推論は支配の関係を示し、後者、即ち、主—奴—物の推論は享受の関係を示していると言うことができよう。ヘーゲルが「否定的」なるものとしての主—奴関係を否定して、「相互承認」の関係を再興していく運動の原理を見出すのは、後者の推論においてである。

ところで、享受の推論が示していることは、主が奴によって加工された「物」と「推理的に連結する」(zusammenschließen)ことによって、「物」を「純粋に享受する」(S. 147) ということである。しかしこうすることによって、主は己れが「自立的意識」であるという確信を真理となすのではない。主は「むしろ己れの真理が非本質的意識であり、その意識のなす非本質行為である」(S. 147) ということを思い知らされるのである。なぜなら、主の「絶対的否定」の行為も、ここでは「純粋なる否定」(die reine Negation) でしかなく、この行為によって得られるものは、「空しさ」(Eitelkeit) でしかなく、何らかの「肯定的なるもの」(das Positive) を得るのでもないか

らである。

これに対して、享受の推論において、ただ物を「加工する」(bearbeiten) にすぎなかった奴の意識の方が、「己れを完成して」「真の自立性に転ずる」(S. 148) ことになる。そうなるのは、奴の労働が「限定的否定」の行為だからである。「奴は己れの否定によっては、物を否定しつくすまでにはいたらない」(S. 146) とヘーゲルは述べている。主の否定が「単なる消失」(S. 149) でしかないのに対して、奴の否定は、「欲望の制止」であり「消失をおしとどめること」(S. 149) であり、同時に「形成すること」(Bilden) でもある。したがって、奴の労働においては、「対象への否定的関係は対象の形となり、持続するものとなる」(ebd.) のである。労働の本質は、物を否定することではあっても、単に物を「無きものとすること」(vernichten) ではなく、物を物としては存立させながら、物の特定の諸性質を否定することに他ならない。したがって、奴の労働という否定は、「限定的否定」(die bestimmte Negation) というべきであろう。(6)

ヘーゲルは「限定的否定」としての奴の労働を主―奴関係を否定する原理としている。というのは、労働が、この関係を成立させていた支配と享受の推論の媒語であった、「物」及び「物性の形態にある意識」としての「奴」を精神的な存在へと転ずることになるからである。労働は「形成」(Bilden) することであるが、この「形成」という言葉は「造形」の意味と同時に「自己形成」としての「教養」(Bildung) の意味を持っている。奴は労働によってまさにこの二つのことを同時になしとげるのである。そして己れを束縛せる桎梏を撤廃し、同時に自ら「自立的自己意識」となるのである。

ヘーゲルは労働を「自己を物となすこと」(7) (das Sich-zum-Dinge-machen)、即ち「疎外」と解している。しか

しこの自己疎外は、「生死を賭した戦い」におけるような疎外とは異なり、同時に「物を自我となすこと」(das Ding zum Ich zu machen)[8]でもある。したがって、奴の意識は労働によって、かって自らが「それを前にして恐れおののいた外的な定在」(S. 149)を否定して、「己れを否定的なるものとして持続の境地へと定立する」(ebd.)のであるが、これは同時に「外的な定在」即ち「物」を「自我」となす、即ち「物」を精神的なるものとなすことでもある。それ故、労働の結果としての「仕事」(Werk)としては、「物」は単なる「物」ではなく、自己意識を介した「物」、即ち、「事」(die Sache)であることになる。

ヘーゲルは、「理性」(Vernunft)の章で、「事そのもの」(die Sache selbst)について詳しく述べている。それによれば、「事そのものは個体性によって浸透された実体」(S. 300)であり、労働の結果としての「仕事」であり、「意識に対して現存在する現実」(S. 294)でありながら、「精神的実在」(das geistige Wesen)であるものである。そしてヘーゲルはこれを「自我である存在、或は存在である自我」(S. 301)とも言い換え、このような「浸透」(Durchdringung)が全うされた「絶対的な事」(S. 301)をもって「人倫的実体」(S. 302)であるとしている。ここから明らかなように、奴は労働によって、主の支配を可能ならしめていた「物」を「人倫的実体」としての「法律」(Gesetz)や「習俗」(Sitte)という精神的なるものへと転化させるのである。こうして奴の意識は自らの桎梏を撤廃するのである。

しかしまた、奴の形成の行為は同時に奴の自己形成の意義をも有していた。奴は労働のかかる契機によって、自ら自立的な自己意識であることを自覚するに至るのである。

ヘーゲルは、奴の自覚の過程を、「畏怖」(Furcht)、「奉仕」(Dienst)、「労働」(Arbeit)という三つの契機をも

って示している。「畏怖において、自分だけでの存在は奉仕する意識に即してあり、形成することにおいては、それは自分自身のものとしてこの意識に対してある。そしてこの意識は自分自身が即かつ対目的にあることを意識するにいたる」(S. 149) という言葉が示しているように、この三つの契機は、奴の自覚の段階に対応している。奴の意識は主を畏怖し、死の恐怖に曝されることによって奉仕を余儀なくされる。そして奉仕することにおいて、まさに己れを束縛せる外的定在を「労苦をもって除去する」(hinwegarbeiten) のである。奴はまさにこの奉仕の中で自らを訓練する。そしてこのことによって、「他人のものという意味しか持たないようにみえる労働のさ中において」(S. 149) 奴の意識には「自分だけでの存在」が「自分自身のものという意味」(eigner Sinn) をもつにいたるのである。

こうして、奴は自らの労働によって、享受の推論の媒語であった「物性の形態にある意識」である己れを精神的なものへと引き上げていく。したがって主—奴関係が止揚されるのは、奴の労働による両推論の媒語の精神化によってである。媒語が精神的なものとなることによって推論は「流動性」(Flüssigkeit) を得て、固定的なものではなくなるからである。

しかし、奴の自覚にとって、上述の三契機はいずれもが必然的(notwendig) である。というのも、若し奴が「絶対的な畏怖」(S. 150) に耐えたのでなければ、奴に生じてくるのは、「自分だけでの存在」の「自分のものという意味」(eigner Sinn) ではなく、「我がまま」(Eigensinn) であり、ただ「若干のもの」(Einiges) に対してだけ威力をもつ「一つの技能」(eine Geschicklichkeit) でしかないからである。したがって、奴の自覚にとっては、「限定的否定」とともに「絶対的否定」もまた必要な契機である。そうして、主の「絶対的否定」に耐え、自ら自立

的自己意識と「成る」奴の立場こそ、「死」を「超えて生きる」精神の立場に他ならないであろう。

四

ヘーゲルの弁証法は否定の運動に他ならないが、この否定の運動にも、これまで見てきたように、「絶対的否定」と「限定的否定」の二つがあった。我々が最初にみておいた、「否定」と「否定の否定」という観点から主—奴関係の論述を見れば、明らかに即自的な相互承認の分裂は最初の「否定」であり、奴の自立的自己意識への生成による「一面的な承認」の克服は「否定の否定」であろう。そして前者の否定には「絶対的否定」、後者の否定には「限定的否定」が対応していた。そして更には、「肯定的なるもの」(das Positive) としての「相互承認」の回復の運動を担うものが、奴の労働という「限定的否定」の行為であったことになる。

ヘーゲルが『現象学』の「序論」において「否定的なるものも、結果という形で把えられれば、この運動から生じてきたものであり、限定された否定的なるもの(das bestimmte Negative) であり、したがって同時に肯定的な内容でもある」(S.49) と述べているように、「肯定的なるもの」は「限定された否定的なるもの」でなければならず、かかる否定性をもたらすものは「限定的否定」であることになろう。ヘーゲルはまた「緒論」(Einleitung) において、「懐疑主義」(Skeptiszimus)への批判に関連させて、次のように述べている。即ち、それによれば、懐疑主義は「いつもただ結果の内に純粋な無だけを見」、「無あるいは空虚を抽象することをもって終る」(S.68) が故に、そこから先へと進んで行くことができない。これに対して、「結果がその真の姿においてあるように、限定的否定と把握される場合には、それによってすぐさま新しい形式が発生しており、否定のうちに移行がなされている」

(S. 68 f.) のである。ここからも明らかなように、ヘーゲルの「否定の否定」が肯定的なるものを生み出すためには、まさにこの否定が「限定的否定」或は「一定の否定」でなければならないのである。そうして「純粋な無」を見るにすぎない「懐疑主義」の否定は、既にみた主の「絶対的否定」と相通ずるものがあることは明らかであろう。

しかしまた、ヘーゲルによれば、運動の結果において生じてくるものは、「それ自身また単純なる直接性、或は無媒介性なのである」(S. 22)、即ち、結果としての単純なる直接性は、まさにこの運動が始元へと還帰したことを示しているのである。したがって、結果としての単純性は、「限定された単純性」(S. 44) でありながら、同時に「絶対的否定性」でもなければならない。この「絶対的否定性」(die absolute Negativität) がヘーゲルの「無限性」(Unendlichkeit) を表わしていることは、奴の意識が経験した「絶対的な主の恐怖」(S. 148) による「あらゆる存立せるものの絶対的な流動化」(ebd.) が「絶対的否定性」とされていたことからも明白である。そしてこの「無限性」こそ「絶対的概念」(der absolute Begriff) であり、知と学 (Wissenschaft) の成立するエレメントであり、また自己意識の自由としての「純粋思惟」の立場もこれを根拠としていたのである。

ところで、主は無媒介的にこの絶対的否定としての立場を主張するものであった。したがって主の「絶対的否定」も、実のところ単なる「純粋なる否定」(die reine Negation) にしかなり得なかったのである。これに対して奴は最初はこの立場を断念せざるを得なかった。それ故に奴は限定的否定の立場をとり、「奉仕の中にあって、己れの自然的定在への執着を、あらゆる個別的な契機にわたって撤廃 (aufheben) する」(S. 148) 労働にとりかからねばならなかったのである。しかしこのような限定的否定もやがては個別的な契機を否定しつくし、それによって奴は

「絶対的否定性」という自己意識の本質を自らのものとなすのである。しかし主を畏怖することなしに自己意識は自ら労働へと向わなかったであろうし、例えそうであったにしても、それは若干のものを否定するに過ぎない「技能」を得るに止ったであろう。

ヘーゲルは無限なるもの、絶対的なるものに直接的、無媒介的に達しようとするのではない。しかし同時にそこに達しなければならない。ここにヘーゲルが「限定的否定」をことさらに重視する根拠が存するのである。こうして「限定的否定」の原理は、ヘーゲルの媒介の思想を支える役割を担わされることになったのである。

おわりに

以上において我々がみてきたように、ヘーゲルの「否定」には「絶対的否定」と「限定的否定」という二つのものがあった。ところで「純粋なる否定」という意味での「絶対的否定」は、欲望としての自己意識の対象を撤廃(aufheben)する行為、戦いの死を目指す行為、及び、フランス革命の「消滅の狂暴」(S. 418)等を意味し、「限定的否定」は「労働」の行為を意味していた。そして「絶対的否定」も「純粋なる否定」としては、全てを無に帰する行為であったのに対し、「限定的否定」は否定的なるものを肯定的なるに転化させる原理であった。ヘーゲルが「限定的否定」をもって弁証法的運動における生成の原理としたことは、それ故に、労働をもってその原理とする近代社会へのゆるぎない確信を表明したものに他ならないであろう。

注

(1) Hegel: P*hänomenologie des Geistes.* Hrsg. von J. Hoffmeister, 6. Aufl., Hamburg, 1952. 以後文中の引用符の後にページ数のみを示したものは全てここからの引用である。

(2) *G. W. F. Hegel Werke* (*Theorie-Werkausgabe*), Bd. 1, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1971. この著作集からの引用は、Wの記号の次に巻数とページ数をもって示した。

(3) Vgl. H. Schmitz: *Hegel als Denker der Individualität,* 1957, Meisenheim am Glan, S. 138 ff.

(4) ヘーゲルによれば「死」もまた無限判断である。Vgl. W. 8. S. 325.

(5) ヘーゲルは、この例として、犯罪における否定をあげている。Vgl. ebd. od. W. 7. S. 181f.

(6) 無限判断の否定が絶対的否定に関係をもち推論の否定が限定的否定に関係することは高橋昭二先生の講義から教えられた。

(7) Hegel: *Jenaer Realphilosophie,* (1805～6) Hrsg. von J. Hoffmeister, S. 214.

(8) a. a. O. S. 189.

（大学院学生）